

問題

極端には、偶然性に任せてランダムに作る作品というものがありません。

絵を描くときに、ただランダムにくじ引きで選んだ色を、くじ引きで選んだ場所に塗るとする。それは、何の意味も目的もない偶然性の画面になります。しかし、どんなにランダムであっても、緑色がたまたま近いところに並んだとか、要素が左側に片寄って置かれることになったとか、人はそこに特徴を見出して、面白がってしまう。つまり、純粹ランダムなものを見ることができないので、何らかのリズム、あるいは作品の構造と言ってもいいですが、それは勝手にできてしまう。開放的な言い方をするならば、がんばって作ろうとしなくていいんですね。ただし、偶然性を先に立てればの話です。ルールあるいは規範にこだわることで、かえってそれに対して不十分下手になってしまう。

〈中略〉

下手というのは、モデルに対して届かないズレです。それに対し、ヘタウマ的と言えるようなセンスとは、モデルに対して「余っている」ようなズレだと考える。届かないズレと、超過するズレがある。この二つの違いというのは、出発点の違いに由来すると思います。

超過するズレというのは、ランダム、偶然性、デタラメ、いわば可能性が余りまくりの状態から限定していくことで生まれるものです。それに対して、モデルに合わせようとしてがんばるために、そこに届かないというズレにしかならないのが下手という現象です。

偶然性から始める。それは、自由な運動性から始めることです。

例を考えてみましょう。絵を描くときに、写真を撮るようにして輪郭線を丁寧に描くのは難しいものです。よほど直観が優れている人でないと、あちこち歪んで不格好な切り絵みたいになってしまいます。それを避けたければ、シュツシュツと大まかな線を何本も引きながら、外堀から攻めていくように、じわじわと輪郭を浮かび上がらせるようにしてみる。ある速さで全体をざっくりと捉え、少しずつ線を内側に向けて限定して行って、形を浮かび上がらせるように描く方がうまくいくでしょう。このやり方がうまくできるようなになると、これは高度な話ですが、一発で輪郭を写し取るような描き方もできるようになるんですが、それには相当の修練が必要です。

しかし、その前段階としてはまず、無駄な線をいっぱい描きながら、そこから形を浮かび上がらせるのが有効なアプローチでしょう。そういう描き方で、完璧にリアルにはならなくても、「形がダイナミックに捉えられている」みたいなもので、まあ、それが自分の絵だと認めてしまっていていいんです。世の中には、

めちやくちリアルに絵を描ける人がいます（しかも、けっこういます）。でもみながそうなる必要はないし、リアルな絵が、絵として最もすばらしいわけではありません。

これは文学でもそうです。たとえば、典型的な恋愛小説を書くとして、出会いのシーンや告白とか、その失敗といったひとつひとつを、はっきりこうだとわかるようなイメージで実現しようとすると、かえって上手くできていない部分が目立ってしまう。きちんと展開させて、読者を飽きさせないようにとか意図しないで、思いつくままに余計なことをいっばい書いていいんですね。そうすると、上手さに届かないがゆえのギクシャクではなく、もっと個性的な、その書き手に独特の崇高さのようなものとしてギクシャクが出てくるかもしれない。場面の描写も、人物の思いも、小説としてよくできているという基準ではなく、自分の身体感覚に従って、書けるように書く——身体から響いてくる偶然性に従って。

ピアノを練習するときにも、二つの態度がありうると思います。一方では、とにかく神経質に間違えないように、楽譜をなぞるように弾くという練習態度がある。しかし、この練習だけでは限界があるでしょう。音遊びのような、自由な柔軟体操のようなアプローチを組み合わせないと、「ちゃんとしよう」という意識ばかりで手が固まってしまう。譜面通りに弾く練習はもちろん必要です。しかしその前提として、鍵盤をめちゃくちゃに叩いたり、ただ指をごにごによさせて遊んでみるような、ランダムに開かれた身体があるべきだと思います。そこからの「絞り込み」として、楽譜に合わせるができるようになっていく（僕はピアノ指導については素人ですが、自分がどう身につけてきたかを振り返ると、そんなふうに見えるだろうと思います）。

優れたピアニストというのは、正確に楽譜通りに弾くことができるわけですが、ただ機械みたいに再現しているのではない。鍵盤の上で指をめちゃくちゃに走り回らせることのできる凶暴なエネルギーを持っていて、その有限化として、あるひとつの曲を弾いているということだと思っんですね。だから、優れたピアニストの演奏というのは、確かに楽譜通りでありながらも、楽譜通りにきちんと弾くということを超えるようなスケール感や迫力を持っている。

このことは部屋のインテリアなど、日常的なものの並べ方にしても言えることです。ちゃんと分類目的を果たすことで頭がいっぱいになってしまうと、それがうまくいかず、整理しきれいていないというマイナス面ばかりが目立ってしまう。

それに対して、もっとおおらかに、適当に並べるといふ自由さをベースにして、部分的に分類したり、適宜必要などころにもものを置くという目的性もある程度満たす——でも全体として、もっとどうにでも別の並べ方もできるという余地が感じられる並べ方がある。

こうでなければいけないというモデルに近づけようと、きっちり合わせることを目標にしてしまうと、自由がなくなって窮屈になる。センスの良さというのは「余り」だと思います。

でも、これはなかなか難しいことで、生活や仕事では、ちゃんと意味を伝えて目的を果たすことが必要なもので、もの見方が全般的にそうになってしまう。そこで、偶然性に関われる練習が必要になってきます。

服を選んだり、部屋に置くアイテムを買うときの好みというのも、無自覚なうちに硬直化していることがよくあります。それをほぐして、もっと自由な選び方ができるようになるには、自分自身に向き合って、自分で自分をマッサージするような取り組みが必要でしょう。人は無意識のうちに、いろんな側面で「こうであるべきだ」ととらわれているからです。しかしまた、個人とは、何らかのとらわれによって特徴づけられるものでもある。

〈中略〉

一方では、偶然性という余剰を、「どう構造化するか」という意識と拮抗させてコントロールするような努力があり、芸術制作においてはそれがメジャーだと思います。他方では、もっとワールドに、身体がそもそも奔放で、自由な運動からザックザックとものを作ってしまいうようなタイプの人もいます。後者が「天然」などと呼ばれるわけです。しかし、天然の人にだって技術はあり、偶然性をそのまま生きているわけではありません。

偶然性と、それに対してどう秩序を作るかが、いろんな事柄において問題になる。

大きな方針としては、次のようなスタンスを提案したいと思います。

- ・自分に固有の、偶然性の余らせ方を肯定する。

目指すものへの「足りなさ」をベースに考えると、それを埋めるようにもつとがんばらなきゃという気負いが生まれ、偶然性に開かれたセンスは活性化しません。それに対して、「余り」をベースに考えれば、自分の理想とするものにならなくても、自分はこういう余らせ方をする人なんだからいいや、と思えるわけです。それは、自分に固有の足りなさだとも言える。ですが、それをもっとポジティブに捉えてみる。その方がより創造的になれると思います。

これはひとつのライフハックで、何かをやるときには、実力がまだ足りないという足りなさに注目するのではなく、「とりあえずの手持ちの技術と、自分から湧いてくる偶然性で何ができるか？」と考える。規範に従って、よりレベルの高いものへと努力することも大事ですが、それに執着していたら人生が終わってしまいます。人生は有限です。いつかの時点で、「これで行くんだ」と決める、というか諦めるしかない。

- ・人生の途中の段階で、完全ではない技術と、偶然性とが合わさって生じるものを、自分にできるものとして信じる。

問1 本文の内容を400字以内で要約しなさい。

問2 本文における「届かないズレ」と「超過するズレ」を踏まえて、あなたの経験や志望する分野について具体例を示し、800字以内で記述しなさい。